

特集 特定用途の標準色票

企画の趣旨

名取 和幸

Kazuyuki Natori

財団法人日本色彩研究所

色票には、大きく分けると、カラーシステムを具現化した「表色系の標準色票」と、特定の色材や設計対象物のために作られた専用の「用途別色票」とがある。

前者には、マンセル表色系に対するマンセルブックオブカラー（あるいはJIS標準色票）やオストワルト表色系に準拠して作られたカラーハーモニーマニュアルがあり、他にDIN、NCS、OSA均等色尺度、PCCS等にもそれらが用意されている。これらの色票は、各表色系に基づき色空間の中から体系的に選定されている。いわば色のものさしのようなもので、その物が何であるのかは問わない。

一方、後者の代表例としてすぐに思いつくのは、塗料系では日本塗料工業会の塗料用標準色見本帳、印刷ではDICやパントーン等であろう。色の指定を行ったことのある人であれば、既にこれらの用途別色票を使用していることと思う。ただし、これらの色票集がどのような検討を経て現在の形になったのかまでを知っている人は少ないであろう。また、設計業務を行わない研究者にとっては、用途別色票に触れる機会もあまり無いのではないだろうか。

また、用途別色票の中には、果実の熟し具合を色で判断するというようなカラーチャートもある。そして、そうしたチャートが食品関係を中心に多種作られ、食の裏方として活躍していることもおそらくあまり知られていない。

そこで本特集では、現在さまざまな実務の世界で使われている「特定用途の標準色票」のうち代表的なものや、研究史として学術的価値の高いと考えられるものについて、それぞれの検討経緯、構成、活用法などを紹介、解説することにした。本特集を通じて、実に多様な用途別色票が作られ利用されていることを、そしてそれぞれに対する検討の歴史をご理解いただければ幸いである。

ところで、用途別の色票が必要となるのは何故だろ

うか。理由の最たるものは、色の伝達をスムーズにし、色再現を確実にする点にあると思う。印刷や塗装を考えればわかるが、何人もの人を経て色は作られる。その際、すべての担当者の手元に同じ現物色見本があれば、常にその色を確認し合える。比較的安価で入手でき、色彩が管理された色票であれば、色番号での指定により色の伝達が出来、素早く、確実な指定が可能となるのである。

また、印刷系であれば、特に蛍光色、メタリック色などといった特殊色を確認するためには現物色見本が不可欠なのは言うまでもない。

他に、対象物の色彩分布の特性に適合しているため確認、設計を行いやすくなるというメリットもあげられる。たとえば義歯を隣りの歯の色と合わせようとするれば、歯の色として出現する色域の中を細分化した色票でなければならぬのは当然であるし、そこまででないとしても、壁クロスの色彩をJIS標準色票で検討することは無理というものである。

先記のように、本特集で扱った色票集は用途別色票のうちの極一部にとどまる。たとえばファブリック系の色票については割愛した点、ご了承ください。なお、その他のさまざまな色票集については大井（1998）に詳しい。合わせて参照されたい。

最後になるが、特集構成は大まかには以下のようになっている。1) 特定の色材用色票集（塗料と印刷インク）、2) 特定対象物の色彩分類・設計用色票集（建築内外装用、自然：土や植物、人間：肌と歯）、3) 特定対象物の色彩管理用色票（食品関係等）

参考文献

日本色彩学会編 1998 新編色彩科学ハンドブック【第2版】（大井義雄『第5章カラーオーダシステム §3その他の色票集』）、東京大学出版会。